

米欧亜回覧

第55号
発行

特定非営利活動法人

米欧亜回覧の会

編集

広報メディア委員会

七月十九日(日)の全体例会は、

瀧井一博氏の講演

「伊藤博文の考えた国のかたち」

七月十九日(日)の全体例会は歴史部会の担当で行われる。伊藤博文は周知の通り、岩倉使節団の若き副使であり、大久保利通亡きあと、明治国家のトップリダーとして、国の設計者であり建築者であり運転者でもあった。講師の瀧井氏はいう、「しかし、その人気や評価は学会においても一般社会においても必ずしも高くない。たとえば司馬遼太郎氏は『伊藤には政治家としての哲学性が、西郷や木戸ほどには無かった。そのぶ



谷村新二氏を迎え大盛況の総会第2部

んだだけ伊藤は、魅力というほどのものを、同時代人にはむろんのこと、後世にも感じさせるところが薄い」と書いている。それに対して「伊藤が明治の政治家の中でも卓越した哲学性・思想性の持ち主であったことを明らかにしたい」と瀧井氏は述べている。それは混迷を深める今日の政治のあり方にも、必ずや貴重な示唆をあたえてくれることだと思ふ、多数の参加をお待ちしている。(詳細は八頁)

谷村新司氏の「語る会」盛会！

四月二十八日の全体例会

当会としては異色のゲストを迎えての新趣向の例会は、四月二十八日夜、日本プレスセンターのホールで行われ、百二十六名の参加を得て盛会のうち終った。今回は、会員外の方の参加が多く、ともすれば「難しい勉強会？」というイメージをもたれかねない当会の新しい展開を予感させた。

会は泉三郎氏(当会理事長)がインタビュアーとなつて始まり、「昴」誕生の秘密から、生い立ち、「いい日旅立ち」の話と広がり、五十五歳の時のリセットの話、上海音楽学院から招聘の経験、そして「ココロの学校」の紹介とドレミの話、それから宇宙、星、新曲「マカリー」へと展開して、聴衆は興味津々、最後まで倦むことを知らなかった。

なお、中国で人気の谷村さんだけに「人民日報」の記者が取材に来ており、日本語版の「日中新聞」では、五月十九日号と二十六日号の二回、米欧亜回覧の会主催のイベント「谷村新司さんを迎えてのトークショー」として写真入りで大々的に報道された。(詳細は二・三頁)

歴史部会、人物にフォーカス

第一回は渋沢栄一

歴史部会では昨年度、日本の近現代史を通観する意味で、岩波新書の「近現代史シリーズ」を十回にわたって読んできました。今年度は新しく人物中心のシリーズで近代史を学ぼうということになりました。その第一回は、六月十五日、渋沢栄一をテーマに渋沢健氏を招いて行われ、第二回が七月の全体例会での伊藤博文ということになります。(第一回の報告は五頁)

当会では今年、スウェーデンをテーマに新年会を行い、引き続きそこにフォーカスして勉強をしていく気運にある。そこで感じることは、スウェーデンといえど高福祉高負担や中立政策で有名だが、なによりも国民の政治への信頼度と参加意識の格段の高さである。その象徴的な事例は、トップリダーたる首相の在任期間に表れている。過去二十年間に日本の首相は十三人も変わった。スウェーデンの首相は僅か四人である。忘れないために列記すれば、宇野宗佑、海部俊樹、宮沢喜一、細川護熙、羽田孜、村山富市、橋本龍太郎、小淵恵三、森喜朗、小泉純一郎、安倍晋三、福田康夫、麻生太郎である。このうち小泉首相だけが五年在位したので、残り十五年間に十二人の首相が誕生したことになる。平均在位期間はなんと一年二ヶ月、これはバブル以降の二十年、日本がいかに迷走してきたかの証明である。

日本の13面相とスウェーデンの4つの顔

泉三郎

ト(すでに三年半)の四人で、平均在位期間は六年になる。しかも、就任時の年齢がとても若い、カールソン 五十二才、ビルト 四十二才、ベーシヨン 四十七才、フィンフェルト 四十一才である。若い人材が首相、大臣の地位につける、それが長期的視野でしっかりと政治をする。その秘密は何か、スウェーデンは政党制であり比例代表制である。したがって政策、人物中心に投票がおこなわれる。その投票率は、国政選挙で長年八十%、九十%をクリアしている。わが国も、若い人材が政治の中枢につけて、じっくり長期的に広い視野で政治を行える体制を整えなくてはならない。それが国の命運を左右する。いきあたりばったり、ばらまき政策、目先だけの利権政治から、いかにして訣別し、政治を正常な路線にのせるか、このことをわれわれは真剣に考えなくてはならない。首長公選制か、完全比例制か、このところ各地で三十代の市長が誕生している、それは民意の表れというべきか。

第51回 全体例会

総会に続き、新趣向のトークショー
谷村新司氏の「宇宙・文明・人」を語る会

平成二十一年度第一回の例会は、四月二十八日(火)午後六時より内幸町、日本記者クラブ十階ホールにおいて開催された。

【一部・総会】

年度第一回目の例会は総会をかねることとなっているため、開会に先立ち出席者の確認が行われた。正会員数は百八十三名、出席者五十三名、書面表決者六十一名、計百十四名で、正会員の半数以上が出席しており、総会は有効に成立した。

まず議長に泉理事長を選出、議事に入った。議題及び審議の内容は以下のとおりである。

■議題

- ① 定款変更について
- ② 平成二十年度の事業報告並びに決算承認について
- ③ 平成二十一年度の事業計画並びに収支予算について
- ④ 役員改選について

■審議内容

①事務所を東京都文京区小日向二丁目二十六番三号山田方に移転すること及び会費を五千円より六千円に値上げす

ることを席上配布の新旧対照表により説明、審議の結果承認された。

②資料により詳細説明、審議の結果承認された。(下表・活動報告以外の決算書類、予算書等総会配布資料は別刷をご参照ください)

③役員人事は昨年総会で一部内諾を得ていたが、今般、登記をするに当たり再度確認し、以下のとおり承認された。重任理事(四名) 泉三郎、藤原宣夫、塚本弘、山田哲司、重任監事(一名) 岩崎洋三、新任理事(三名) 西井正臣、石垣禎信、近藤義彦。(文責) 山田哲司

【二部・谷村新司の「宇宙・文明・人」を語る会】

全体例会は、これまでとは違った新たな趣向で講演者に谷村新司氏をお招きし、会の内外から百二十六名が集まり設立十三年目を迎えた節目の年にふさわしく華やかに行われた。谷村氏はシンガーソングライターから上海音楽学院の教授に就任し、昨年還暦を迎えると同時に小説「昂」を出版し、これまでの音楽人生に音返しをしようと「ココロ

(平成20年年4月～平成21年年3月)

	全体例会	実記・英訳読む会	現未来部会	歴史部会
2008年	第47回例会(4/20) NPO総会 NHKBS「世界から見たニッポン」 (明治編) 辻泰明氏	第117回実記読む会(4/10) 北日耳曼前記 ★第59回英訳読む会(4/17)	「地球環境問題」 塚本弘氏(4/22)	「銃を持つ民主主義」 日米関係と大統領選挙 松尾文夫氏(4/1)
4月				近現代史シリーズ 「幕末・維新」 小野博正氏(5/19)
5月		第118回実記読む会(5/8) 北日耳曼、後記上・下二巻 *実記を読む会・番外編(5/27) ★第60回英訳読む会(5/15)		近現代史シリーズ 「民権と憲法」 大平忠氏(6/30)
6月		第119回実記読む会(6/12) 北日耳曼、後記上・下二巻 ★第61回英訳読む会(6/19)		(番外編)世界の江戸化 「エドナイゼーション」論 小野寺満憲氏(7/29)
7月	第48回例会(7/12) 「岩倉使節団は明治日本に何を もたらしたのか」(出版記念講演) 泉三郎氏	第120回実記読む会(7/10) 以太利国ノ略説 ★第62回英訳読む会(7/17)	「安全保障問題」 永島脩一郎氏(7/23)	
8月				
9月		第121回実記読む会(9/11) 「高田ゼミ」打ち合わせ ★第63回英訳読む会(9/18)	「市場原理主義を見直す」 西井正臣氏(9/24)	近現代史シリーズ 「日清・日露戦争」 大森東亜氏(9/22)
10月	第49回例会(10/18) 「地球温暖化への挑戦—政府・ 企業・市民は何をすべきか」 西岡秀三氏	第122回実記読む会(10/9) ローマ市の記・上 ★第64回英訳読む会(10/23)	第49回例会企画 「地球温暖化への挑戦—政府・企業・ 市民は何をすべきか」 西岡秀三氏	近現代史シリーズ 「満州事変から日中戦争へ」 藤原宣夫氏(10/21)
11月		第123回実記読む会(11/13) 瑞士蘭山水ノ記 *実記を読む会・番外編(11/26) ★第65回英訳読む会(11/20)		近現代史シリーズ 「アジア・太平洋戦争」 藤田貴氏(11/18)
12月		第124回実記読む会(12/11) ナポリの記 ★第66回英訳読む会(12/18)		近現代史シリーズ 「大正デモクラシー」 桑名正行氏
2009年	第50回例会(1/16) 「新年懇親例会」 テーマ「スウェーデン」	第125回実記読む会(1/8) 芳野健二氏による報告 ★第67回英訳読む会(1/15)		
1月				
2月		第126回実記読む会(2/12) 「ザピエルから漱石まで—日本と 西洋の出会い」吉野健二氏 ★第68回英訳読む会(2/19)	「経済人から見た日本国憲法」 高坂節三氏(2/25)	近現代史シリーズ 「高度成長」 山田哲司氏(2/16)
3月		第116回実記読む会(3/13) 「久米邦武」をめぐって ★第69回英訳読む会(3/19)		近現代史シリーズ 「占領と改革」 西井正臣氏(3/23)



谷村氏と泉氏

の学校」というキャラバン隊を作って全国各地を回っている。そこには氏自身の志の高さと応援してくれた人への感謝の気持ち、人と人とのつながりを大事にする心、日本社会に明るい未来を育てようという熱意が表れている。こうした志、熱意、心は当会の趣旨と合致していることから今回の企画に至った。その経緯については、はじめに泉代表から説明があった。

続いて泉氏が聞き手となつて谷村氏の心の世界を探り、会場全体は岩倉使節団と谷村ワールドとのコラボレーションに包まれ参加者全員を魅了した。いつもなら聞けない本当に伝えたいことが、エピソードとユニークな対話によって引き出されたように感じる。男性優位の社会は縦社会、女性優位の社会は横社会、この縦と横が同じ長さになった時に地球は最もよい状態になる、という話や西洋も東洋もかつては渦巻き模様の



DVD第1章の上映

文化があったという話、それは文化と文明のあり方を再考する契機を与えてくれた。また、人間の体と音感、人間の体は音に反応するように通じているという話、ブラームスの交響曲には日本語の詩がのらず、三拍子を四拍子にするなどで初めて調和がとれるという話は、改めて感性と感性の響き合いの素晴らしさを気付かせてくれた。谷村新司氏のいう宇宙・文明・人、その和合には「心」ありということは、国境を越えて人々が往来するグローバル化のシモン時代において最も大切なことではなかるか。当日のアンケートからも窺えるように、それぞれの方が感動を胸に楽しんでくださり、最後は「いい日旅立ち」の曲とともに閉会となった。

(文責) 小松優香
(写真) 橋本吉信

「米欧亜回覧の会」平成20年度(2008年度) 活動報告

	DVDを見る・聞く・語る会	総務部会・広報メディア委員会	関西支部	グローバル・ジャパン研究会
2008年				
4月	第1章「使節団の出發」 JICA地球ひろば(4/12)		第43回例会(4/12) 実記に基づき「比較宗教論」 を議論	「日本発の世界平和構想を —グローバルジャパンのための 具体的提案」 吹田尚一氏(4/18)
5月	第2章「新しい国アメリカ、大陸横断の旅」 第3章「ワシントン滞在と東部回覧」 聖心女子大学(5/11)			「集団的治療から個の治療へ」 西井易穂氏(5/17)
6月	第4章「最盛期の英帝国を往く」 第5章「英国の光と影」 JICA地球ひろば(6/14)	ニュース51号(6/1) 広報メディア委員会設立(6/3) 「米欧回覧実記」(全5巻)現代語訳・ 普及版(慶応義塾大学出版会)		「貪欲収奪文明から最適循環文明へ —直観的提言」 泉三郎氏(6/21)
7月	第6章「麗都パリとフランスの底力」 第7章「新興ドイツと大国ロシアそして 小国の智慧」 JICA地球ひろば(7/5)	第2回広報メディア委員会(7/4)	第44回例会(7/12)	「憲法9条を世界の宝に」 安原和雄氏(7/14)
8月		第3回広報メディア委員会(8/4)		「グローバルトヨタウェイ —ダイアレクティブ・アプローチ」 石坂芳男氏(8/30)
9月	第8章「西洋文明の源流イタリアそして アルプスの国」 第9章「中東アジア植民地地帯回覧」 JICA地球ひろば(9/13)	ニュース52号(9/5) 第4回広報メディア委員会(9/1)		「世界に発信する日本文明の課題」 永池榮吉氏(9/20)
10月		第5回広報メディア委員会(10/1)	第45回例会(10/18)	「日本美術から世界への発信」 塚田晴可氏(10/6)
11月		第6回広報メディア委員会(11/7)	DVD上映会・第1回 「米国編」 弥生会館(11/22)	第1回から第7回までの「まとめ」 および参加者全員で自由な 意見交換(11/21)
12月		ニュース53号(12/10) 第7回広報メディア委員会(12/4)		
2009年				
1月			DVD上映会・第2回 「英国・仏蘭西編」 弥生会館(1/24)	
2月				
3月		ニュース54号(3/30) 2006年国際シンポジウム報告書出版 (慶応義塾大学出版会)	DVD上映会・第3回 「独逸、欧州諸国、亜細亜編」 弥生会館(3/7)	グローバル/デジタルVSローカル/ アナログ」 石垣禎信氏(3/16)



GHQマッカーサー執務室見学 (歴史部会)

歴史部会報告

連絡 小野 博正



mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

■第九回読書会『占領と改革』(雨宮昭一著)

三月二十三日、出席者二十一名。報告者は西井正臣氏。

読書会に先立ち、第一生命本社に残されて

GHQ総司令室であるマッカーサーの執務室を見学した。石坂泰三氏が愛用した部屋を提示したという実務的な部屋を見て、すっかり占領期のモードに入ったところで、西井氏の話の聞いた。

日本の戦後改革の原点は、総力戦時体制にあり、GHQの押し付け改革がなくても、戦後改革は実現したという著

者・雨宮氏の考えに違和感を覚えたという西井氏は、主として、五百旗頭真、北岡伸一、岡崎久彦、中村正則、保坂正康、半藤一利氏らの文献によって、日本の敗戦から、独立回復までの歴史を回顧した。それは、詳細を極め、流れるような見事な解説であった。占領と改革は、日本の内在的な民主化意欲と、占領軍の政策が絡み合って達成された。その後、冷戦の進行と、国内外の状況変化に応じていくばくの変化も見られた。

敗戦は日本にとっては初めての体験で、その衝撃は明治維新を凌ぐ。アメリカは開国を迫り、日本の近代化を助け日露戦争の仲介もしたが、ついには軍国主義日本を開戦に追い込み、大戦で徹底破壊させ、そして、再び占領政策で、日本を再生させた。マ元帥と吉田茂の組み合わせが、天皇制を維持しながらの占領改革を可能にし、その後の冷戦の影響もあって、日本の対米依存、軽軍備、経済至上主義の基本路線が確立した。

占領政策は、二十一人万人の公職追放と厳しい検閲の結果、よかれ悪しかれ、日本人の精神構造を完全に破壊することに成功した。戦後六十年を越した今も、占領政策がもたらした基本路線は変わっていない。そこで、今後問われるのは、日本国、日本人として、現実の世界情勢の中で、国民の安全と幸福をいかにして確保できるのか、日本の強みと弱みを自覚した上で、経済至上主義に代わる、グローバル世界の中で尊敬される国創りのために、歴史、伝統、教育、政治をどう見直し、構想するかであろう。

グローバリゼーションは、七十年代初頭の為替の変動相場制への移行により、莫大な金融マネーの越境的流通から始まった。今の金融は、金遊、金幽、金憂の極みにあって将来の方向性が見えてこない。日本も、戦後、まずまずの成功を収めてきたが、官僚力の衰退、政治家の構想力不足が問われて久しい。

また、リポーターを持ち回りで担当したこともあり、参画意識が高く、様々な視点が提示され、共に励まされながら、近現代史を通読出来たことは、かけがえのない機会であったとの評価が多かった。

代、多様性など。
 「⑧家族・地域」孤独を回避するために、擬似家族、複数世帯家族化、複合家族、などにより、地域コミュニティを復活させ、子供たちの教育も連帯する。

以上、参加戴いた皆様のご協力を深謝する。なお新年度は、人物を中心に迫る講演会を主体に進めたい、引き続き多くの皆様のご参加をお待ちする。

■講演会

六月十五日、渋沢健氏(渋沢栄一の曾曾孫、コモンズ投信会長)を講師に迎え、「渋沢栄一『論語と算盤』の現在の意義について―新しい資本主義のゆくえ」をテーマとした講演会を開催した。参加者は二十名。

渋沢栄一は、縁あって、將軍になる前の一橋慶喜に仕えて心酔し、慶喜の弟、昭武の遣欧使節団に加わった。帰国後、一介の静岡藩主となっていた慶喜の推奨もあって、新政府の大蔵省に招聘され国税の基礎を創る。その後、第一国立銀行を創設、国の繁栄の基本は民業の育成にありと、生涯に四百七十六社の企業の創設・経営に関わった。

「論語と算盤」に見られる経営訓は、正しい道理のある富でなければ、その富は完全に永続することはできない。事

業は個人と共に、国家社会も利するものでなければならぬ。と、智・情・意の揃った常識ある経営、経済道徳合一主義を生涯かけて実践した。数々の慈善事業にも係わり、東京養育院には、九十一歳で死ぬまで関与した。

現在、おりしも世界経済は危機に直面している。この渋沢栄一の経営理念が、いま見直されるべきではないか。

講師の健氏は、今後目指すべき、新しい資本主義のあり方として「生命的資本主義」を提唱する。企業も一つの生命体と考えると、三十年、五十年のスパンで経営を考えることが、国、社会、そこに働く従業員、ひいては株主や、消費者のためにもなるのではないか。

これからは、企業文化、環境適応能力、持続可能な経営力、時宜を得た海外展開やブランド創造力を見る目を養い、そういう会社に、長い目で投資する賢い、プチ投資家の出現が、日本を元気にするのではないか。日本の企業は、沢山の発展する萌芽(シーズ)を持ちながら、それを前向きに育てるプロセスの面に弱点がある。明治維新のように、四十歳ぐらいの中心の力を信用して、もっと、政治経済に生かすべきときではないか。(文責) 小野博正

英訳実記を読む会報告

連絡 岩崎洋三

Tel & Fax 03-3488-0532

iwasaki-yz@jcom.home.ne.jp



■第六十九回

三月十九日、出席四名。第四十六章パリ市の記五。

フオンテンブロー宮、建築学校、鉱山学校、レキセンブルール王宮、フランス銀行を訪問。フランス銀行については、ベ

ルリン留学を中断してパリを訪れていた青木周蔵が「フランス銀行は(普仏戦争敗戦に伴う)ドイツへの賠償金支払いで金庫が空っぽになっていたので訪問に値しない」と疑問を呈したにもかかわらず訪問しただけに、銀行業務の実際について細かな記述があり、使節団の意欲が窺える。なお、英文注記によれば、この間使節団としては珍しく学者(統計の権威モーリス・ブロック教授)を訪問していた。

■第七十回

(文責) 岩崎洋三

四月十六日、出席六名。第四十七章パリ市の記六。

コブラン製造場、チョコレート製造場、天文台、裁判所、牢獄、羅紗織場を見学。久米は、コブラン織をセーブル磁器と並ぶパリの二大美として、職人芸の継承

の難しさに言及しているのは先見の明がある。天文台見学の部分で、フランスは精密な学問では他国をリードしていると持ち上げ、久米はフーコーによる望日鏡発明の年を一八六九年としているが、フーコーの他界は一八六八年と英訳注記に指摘されている。裁判所見学部分で久米は「陪審員がいて」と記述しているのを、英文注記は「フランスの法廷に陪審員がいたかどうか疑問。久米は弁護士と陪審員を混同している。」としている。しかし、お雇い外国人で「日本近代法の父」と言われた仏人法学者ポアソナードによる治罪法草案に「重罪事件ヲ裁判スルニ陪審官ヲ設ケ」とあり、久米の方が正しいかも知れない。

五月二十一日、出席五名。第四十八章パリ市の記七。

本章での日程は使節団パリ滞在期間の約半分を占める。一行はクリストフル金属細工会社、官立聾盲両院、動物園、香水工場、ブローニーニユの森、菓莖工場を訪れ、更にミュザ仏外相と日仏条約改正に関して協議し、経済学者モーリス・ブロック教授と懇談、仏国新代表とも面会したり、又仏政府代表を招宴し、テイエール大統領主催晩

■第七十一回

(文責) 岩崎洋三

六月十八日、出席七名。第四十九章ベルギー国総説。

交代で本文を約二頁ずつ朗読。英訳者が付けたNotes 1-10の和訳を紹介、英訳についての疑問点、問題点箇所を指摘。さらに、Notesに引用されているIan Nish編『The Iwakura Mission in America and Europe』の第四章ベルギーの該当部分の原文(Van de Walle著)およびWilliam Murhead著「地理全誌」の和訳の該当部分のコピーを資料として添付配布した。

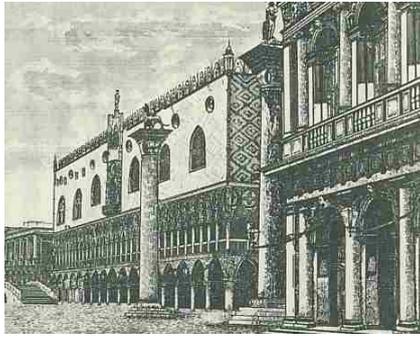
餐会にも招かれている。久米は英仏工業の対比、欧州人の自主独立の気風、日本の象眼、七宝細工、優れた和紙の製造、盲人女性の「玲瓏縹渺」とした神から授かった歌声などに言及、特に、煤煙都市倫敦と「緑陰清風の麗都」巴里に象徴される機械重視のイギリス、人力と機械が調和されたフランス両国工業経営の特徴を適確に洞察している。

なお、当日疑問のままであった「Note 12. 第四十一章、Note 7参照」の内容が本文にマッチしない事については、後日「Note 7」は「Note 8」の書き間違いであろうとの推測をメールで報告した。

■七十二回

(文責) 岡部國雄

六月十八日、出席七名。第四十九章ベルギー国総説。交代で本文を約二頁ずつ朗読。英訳者が付けたNotes 1-10の和訳を紹介、英訳についての疑問点、問題点箇所を指摘。さらに、Notesに引用されているIan Nish編『The Iwakura Mission in America and Europe』の第四章ベルギーの該当部分の原文(Van de Walle著)およびWilliam Murhead著「地理全誌」の和訳の該当部分のコピーを資料として添付配布した。



ヴェネツィアの旧政庁(『実記』)

実記を読む会報告

連絡 桑名 正行

Tel&Fax 03-3642-9570

mkuwana@nifty.com



■第二百二十七回

三月十二日、出席者十名、第七十九巻・奥太利国ノ総説。
 当地はオーストリア・ハンガリー帝国という二重帝国であった。
 教育が普及し、各地に大学もあるが、官僚制度をとらねばならない時代で、言語教育が大変むずかしい問題であった。
 経済問題では、一八四八年の三月革命の最中の農民開放令によって農民が都市に集まり、産業革命がおきた後だった。しかしそれはウイーンの周辺とボヘミア州とメーレン州に限られていた。

オーストリアの歴史は神聖ローマ皇帝を長年受け継いだ

ハップスブルグ家の歴史といえる。もう一つは、一七四八年の王位継承戦でシレジア地方をプロイセンに略奪されたことである。プロイセンの軍の出し方の早さに驚き、マリ

■第二百二十八回
 四月九日、出席者十一名、第七十八巻・ロンバルジー及びヴェネツィアの記。

初めてを試みとして、英訳実記の訳者が、この章に付けた注(一〇九)の和訳を紹介する資料を準備した。また、久米の原文のハイライト部分を出席者に交代で数行ずつ朗読してもらい、注の説明やカタカナの地名などの正しいスペルを紹介した。
 塩野七生の「海の都の物語」から引用した「ヴェネツィア共和国政体略図」の資料を基に説明後、支倉常長について桑名氏提供の「明治政府

における慶長遣欧使節の認識過程」と題する佐々木和博氏の労作、その他を参考に作成した資料「岩倉具視による支倉常長の再発見」を紹介した。一六一三年、支倉一行は石巻で建造されたサン・ファン・パウテイスタ号で太平洋を渡り、メキシコを経てマドリッドではスペイン国王、ローマでは教皇パオロV世に謁見、七年後に帰国したが、派遣した伊達藩は禁教令のため、関連資料を明治に至るまで封印していた。現在、石巻市には、実物大のサン・ファン号が復元されており、金本さんから見学談を聞かせていただいた。

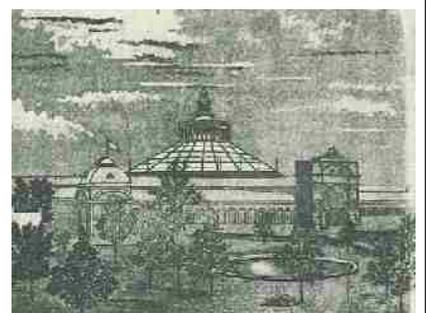
■第二百二十九回
 五月十四日、出席者七名、第八十巻・オーストリー道中並びにウイーンの総説。

一行は、列車でヴェネツィアを発ち、ウイーン南駅に着した。アルプス山脈東部の険しい峡谷を走り、峠を越える行程を地図でたどった。中でも最大の難所センメリング山塊を超えるとき、車窓に展開する急峻雄大な風景を、久米は得意の美文の筆致で存分に描写し、陶酔境にあるが如し。原文で実記を読み味わうに値する圧巻の個所である。当時は時速六キロの速歩程度の走行で、ゆっくり眺めて記

録できたが、現在は、メモを取る暇もないだろうとのこと。この世界最高地点を走るセンメリング山岳鉄道は、わずか六年で完成、使節団の十八年も前に開通している。石積みの大規模な高架橋やトンネルは、アルプスの大自然と調和し、優れた建設技術と環境文化的視点から、一九八八年ユネスコの世界遺産に登録されている。

貴族専制国家で身分差別の強い保守の後進性が残り、軍人の訓練には「華やか過ぎ甘さがある」と、久米は観察している。一八六九年、日本と友好通商条約が締結され、外交関係が成立した。「ヨーロッパ統合」の提唱に生涯を捧げたリヒャルト・クレーデンホーフ・カレルギーの母は、日本女性「カレルギー・光子」である。(報告者) 橋本吉信

■第三百十回
 六月十一日、出席者十二名。第八十二巻・維納万国博覧会見聞ノ記上、第八十三巻・維納万国博覧会見聞ノ記下。
 上巻、今まで欧州諸国を回覧してきたが、まだ一部に過ぎない。幸いこの万博に出会い、はじめてのものを実見し、また今までの見聞を再確認し、『実記』を纏めるのに役立った。八十二巻はこのように書きはじめ、万博の由



ウィーン万国博覧会の中央会場(『実記』)

来、会場の建築、各国列品の概略と続く。

下巻、各国列品の紹介。ドイツは連邦各国ごとに展示され、オーストリアの出品物の種類は他を圧する。この両国は兄弟のようなもので、もの作りもよく似ている。併し、オーストリアは奢侈(過度な贅沢さ)である。ロシアは出品品多く、地味だが注目すべきものが少なくない。自然に忠実でありながら美もあり、興隆の雰囲気を感じられる。欧州諸国すでに爛熟の気あるなかで、「露国独り芳ヲ含ミテ、未タ開カサルモノ」如シ、将来永ク世界中ニ畏ルヘキ大国ナリ」と結んでいる。日本については全体として好評、とくに漆器、七宝、象眼細工などはよいが、陶器、織物などにまだ工夫を要する。また歌舞伎役者の似顔絵などは冷や汗ものだと手厳しい。(報告者) 小林富士雄

現未来部会報告

連絡 塚本 弘

Tel 03-3221-6161 Fax 03-3221-6226
hiroshi.tsukamoto@eu-japan.gr.jp



■市場原理主義を見直す

昨年九月二十四日開催、出席者十三名。

折しも、米証券大手リーマン・ブラザーズが経営破綻した直後で、世界の金融業界に再編・淘汰の嵐が吹き荒れる真只中での開催だった。現在なお、百年に一度とも云われる大不況からの脱出に悪戦苦闘が続き、議論はまだ新鮮さを失っていない。

西井幹事が十七項目の論点を提示して順次説明を加え、その後議論に入った。提示された論点は「小泉改革は何であつたか」「市場原理主義の見直しとは」「日本経済の失われた二十年」「市場原理主義が機能する条件」等。

小泉改革は、何をどう改革しようとしたのか未だによく解らない。成長したのは大企業と一部投機家の利益だけではなかったのか。不良債権の処理、グローバル化、少子高齢化への対処、財政改革、道路公団、郵政の民営化、会社法の大改革など色々あり、日本の政治に一つの風を入れたのは評価できるとしても、格

差は拡大し、企業家の身勝手さを助長しただけではなかったか、と手厳しい意見が出された。

また、「明治以降の日本の市場経済」の変遷について、欧米との比較をしながら、近現代経済通史概説とでもいふべき説明・論評は興味あるものであつた。今回の経済危機の元凶は、規律なき自由の暴走、真の市場主義が禁欲的節度を失った結果の暗転であつた。市場経済原理主義を標榜していたアメリカは、今や大きな政府に転換、巨額な財政出動を余儀なくされている状態にあり、国家をも揺るがす危機的状況にある。

日本についての西井氏のまとめは「中央集権体制の打破」と「道州制地域主権と観光立国の進め」であつたが、討論の焦点は、サブ・プライムローン問題に端を発した金融経済の混乱が続くアメリカ、ヨーロッパ、そして日本について今後の展開の方向となつた。正に解のないテーマであるが、現未来部会らしい会合であつた。

■経済人から見た日本国憲法

二月二十五日開催、出席者十四名。講師は高坂節三氏。

高坂氏は、伊藤忠商事の常務取締役・栗田工業会長などを歴任された生粋の経済人ながら、父は哲学者・正顕、兄

は政治学者・正堯という学者家系。

経済同友会幹事、憲法問題調査委員会委員長を務め、その折調査・考察されたものをまとめて、「経済人から見た日本国憲法」(PHP新書)を執筆。「海外での生活、ビジネス経験を横軸に、憲法調査会での勉強を縦軸にすえて日本の抱えている問題を考えしてみた」という著書をベースにした講話は、平易で巧みな語り口で進められ、現役役員時代の幾つかのエピソードも交え、経済人の視点ならではの興味ある憲法に関する諸問題を聞くことができた。

憲法問題は、古くて新しいテーマであるが、改めて奥の深さを感じさせられた。高坂氏は、「私がつとも懸念するのは、日本人の自立性の欠如、国に頼って国を支えず、という精神構造である」、

「世界との関係が広がり、深まる一方、こころの鎖国状態はむしろ深刻になつていく」、また、「戦後の憲法解釈が個人の自由、個人の尊重のみを強調しすぎてきた、個人と公、個人と国家の関係を、日本の歴史・文化の中で再検討するべき時期に来ている」と幾つか注目すべき意見を述べている。著書を、是非一読されたい。

(文責) 小田仁彦

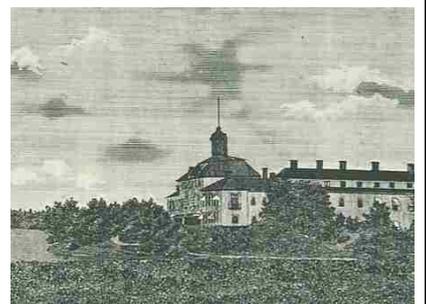
■高福祉国家の実像—スウェーデンから日本の未来を考える

六月二十六日開催、十六名出席。藤井威元駐スウェーデン大使から、スウェーデンの福祉政策を中心に大変示唆に含む話を聞いた。

スウェーデンの高福祉国家への道は、一九六〇年の高福祉ビジョン「豊かさを実感できる社会を作ること」に始まり、この頃から、国家の目標として、成長を追求するのではなく、国民生活の充実を目指すことが明確にされている。以来、税・社会料負担のGDP比は、六〇年の二六・九%(ちなみにこれは、二〇〇六年の日本の数値二六・四%とほぼ同じ)から、年々増え、六八年四〇・三%、七七年五〇・九%となつた。付加価値税は、六〇年の四・二%から、六六年に一〇%、七一年に一七・六五%と引き上げられた。

何故、このような高負担が可能であつたか。一言でいうと、この負担に伴って、介護・保険等への国家給付が大変充実し、国民の「受益感覚」に訴えることに成功したからである。二人の偉大な首相、ハンソン(一九三二年〜四六年)、エランデル(一九四七年〜六九年)の貢献も大きい。その後も、「子供が生まれないと経済は成長しな

(文責) 塚本弘



ストックホルム近郊の病院 (『実記』)

い」との考えの下に、児童手当、住宅手当、育児休暇など大変手厚い政策により、一時一・六一(一九八三年)まで落ちていたスウェーデンの合計特殊出生率は、二〇〇七年一・九一まで回復している。フランスの育児政策も、たくさん子供を持つほど、税制上有利となる仕組みにより、一九九二年に一・六五まで落ち込んだ数字が、二〇〇八年には二・二にまで回復している。

日本においても、税を引き上げ、国民に納得してもらえぬ給付を行うことにより、少子化を防ぎうるというのが、藤井元大使の意見であつた。これに対し、スウェーデンでは、うまくいったかもしれないが、今の日本の政治状況では、なかなかそうはいかないのではないかとというのが、多くの参加者の感慨であつた。

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

趣旨 この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会員 趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例会 年に4回、全体例会があります。

部会 テーマ別に読む会、歴史、現未来部会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙 年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役員 理事長(泉三郎)他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会費 年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局 「米欧亜回覧の会」
〒112-0006
東京都文京区小日向 2-26-3 山田方
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:080-6612-1101 FAX:043-238-6690

入会申込

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5,000円を頂きます。

なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。

00180-2-580729 特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ等
また、書籍・DVD案内もあります

<http://www.iwakura-mission.jp>

*お知らせ欄も時々チェックしてください



<催し案内>

2009年7月～10月の予定です

☆7月全体例会

日時：7月19日(日) 13:30～
会務報告 13:30～14:30
講演 14:45～17:00
懇親会 17:30～19:30
テーマ：伊藤博文の考えた国のかたち
—没後100年を記念して

ゲスト：瀧井一博氏
場所：国際文化会館講堂 03-3470-4611
懇親会 華珍楼 03-3588-6255
会費：例会 2,000円
懇親会 5,000円

☆実記を読む会

日時：7月9日(木) 18:30～21:00
9月10日(木) 18:30～21:00
10月8日(木) 18:30～21:00
11月12日(木) 18:30～21:00

場所：国際文化会館
会費：1,000円

☆英訳実記を読む会

日時：7月16日(木) 18:30～21:00
9月17日(木) 18:30～21:00
10月15日(木) 18:30～21:00

場所：国際文化会館
会費：1,000円

☆グローバルジャパン研究会

日時：8月28日(金) 18:30～21:00

場所：国際文化会館

グローバルジャパン研究会では、2008年度の十回にわたる研究会の内容を、このたびA4版106ページの報告書(内部資料)としてまとめました。当日は、それをベースに今後の研究会の進め方について討議する予定です。申込み、問い合わせは事務局(小松)まで。

☆関西支部

日時：7月11日(土) 13:30～16:30

テーマ：例会

場所：大阪弥生会館

編集後記

◇例年、年度第一回目(1)の号は、決算書類など総会配布資料が二〜五頁の多くを占めています。今号もその予定でいましたが、部会報告が多数あり、総会配布資料の四つの表を別刷りにして記事面を確保しました。その結果、実記を読む会、英訳実記を読む会と歴史部会はそれぞれ四回、現未来部会(三回)の部会報告を掲載することができ、通常は次号掲載となる開催日の回もほぼ報告することができました。

◇現未来部会報告(七頁)では、昨年九月開催の回を遅ればせながら掲載しました。これは、部会との連絡・確認の際に抜けていた結果で、指摘されるまで気がつきませんでした。この場を借りてお詫びいたします。

◇全ての催事、部会などの開催日程などを少人数の事務局が完全に掌握するには限界があります。ニュースやメールによって流される開催案内などの間違いや抜けに気がついた方は、細かなご連絡をください。会員の自主的な活動によって成立している当会の運営は、全員の参加意識と協力が不可欠であることを再確認したいと思います。

平成20年度(2008年度) 会計収支計算書

平成20年度
特定非営利活動にかかる事業
会計収支計算書

平成20年4月1日から
平成21年3月31日まで

特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会

(単位:円)

科 目	金 額	
I 収入の部		
1 会費・入金金収入 入金金収入 会費収入	55,000 900,000	955,000
2 事業収入 講演会等事業収入 (部会活動収入を含む)	1,451,000	1,451,000
3 特別賛助金	2,839,000	2,839,000
4 その他収入 書籍、資料等販売手数料 利息収入他	684,000 3,992	687,992
当期収入合計(A) 前期繰越収支差額		5,932,992 703,322
収 入 合 計(B)		6,636,314
II 支出の部		
1 事業費 (1) 講演会等事業費 (2) 会報発行事業費 (印刷費) (郵送費)	1,292,078 408,195 (246,475) (161,720)	1,700,273
2 管理費 電話・通信費 会議費 事務費 人件費	191,725 115,110 395,201 601,680	1,303,716
3 その他 慶弔費 バーチャルオフィス	100,000 40,491	140,491
当期支出合計(C)		3,144,480
当期収支差額(A) - (C)		2,788,512
次期繰越収支差額(B) - (C)		3,491,834

平成20年度(2008年度) 会計貸借対照表

平成20年度
特定非営利活動にかかる事業
会計貸借対照表

平成21年3月31日現在

特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会

(単位:円)

科 目	金 額	
I 資産の部		
1 流動資産 現 金 ・ 預 金	4,491,834	
流 動 資 産 合 計		4,491,834
2 固定資産 固 定 資 産 合 計		
資 産 合 計		4,491,834
II 負債の部		
1 流動負債 流 動 負 債 合 計	1,000,000	1,000,000
2 固定負債 固 定 負 債 合 計		
負 債 合 計		1,000,000
III 正味財産の部		
前期繰越正味財産		703,322
当期正味財産増減額		2,788,512
正味財産合計		3,491,834
負債及び正味財産合計		4,491,834

平成21年度 特定非営利活動にかかる事業 会計収支予算書

平成21年4月1日から平成22年3月31日まで
特定非営利活動法人 米欧亜回覧の会

(単位:円)

科 目	金 額	
I 収入の部		
1 会費・入会金収入		
入会金収入	70,000	
会費収入	900,000	970,000
2 事業収入		
講演会等事業収入	1,500,000	
部会活動事業収入	600,000	2,100,000
3 補助金等収入		
地方公共団体補助金収入		
民間助成金収入		
4 寄付金収入		
5 基本金運用収入		
基本金利息収入		
当期収入合計(A)		3,070,000
前期繰越収支差額		3,491,834
収 入 合 計 (B)		6,561,834
II 支出の部		
1 事業費		
講演会等事業費	1,400,000	
部会活動費	600,000	2,000,000
2 会報事業費		
印刷費	300,000	
郵送費	200,000	500,000
3 事務費		
電話通信費	300,000	
会議費	150,000	
事務費	600,000	
人件費	750,000	1,800,000
当期支出合計(C)		4,300,000
当期収支差額(A) - (C)		△1,230,000
次期繰越収支差額(B) - (C)		2,261,834

平成21年度(2009年度) 事業計画書

平成21年4月1日から平成22年3月31日まで
特定非営利活動法人 米欧亜回覧の会

事業実施の方針 平成21年度は、事業の中心を講演、部会活動、会報(ニュース)発行の3本柱とする。

事業名	事業内容	実施予定日時	実施予定場所	従事者の予定人数	受益対象者の範囲 及び予定人数	支出見込み額 (千円)
講演会	講演会年3回 交流・交歓会年1回	4月、7月、10月、1月	日本プレスセンター	各回8名	一般市民 講演会(各回)80 交流会90名	1,400
部会活動	研究及び啓発活動	部会により、毎月又は年4	国際文化会館他	各回3名	一般市民 各回25名	600
会報(ニュース)発行	会の活動に関する会報の発 より研究・啓発を行う	季刊(年4回)		3名	一般市民 各号800部	500

注) 部会とは、「実記」を読む会、英文「実記」を読む会、歴史部会、現未来部会、国際部会、青年部会、グローバルジャパン研究会、総務部会、広報メディア委員会の9部会である。